



Title	「森のミヒエル」とは誰か？
Author(s)	岡田, 江里
Citation	独語独文学研究年報 = Nenpo. Jahresbericht des Germanistischen Seminars der Hokkaido Universität, 44: 28-48
Issue Date	2018-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/70503">http://hdl.handle.net/2115/70503</a>
Type	bulletin (article)
File Information	44_02_okada.pdf



[Instructions for use](#)

## 「森のミヒェル」とは誰か？

岡田江里

### 1. はじめに

「昔の森のミヒェル (Holzmichel) <sup>1</sup>はまだ生きているのか？」これは、2007年の『シュピーゲル』(Spiegel)に掲載された記事の見出しである<sup>2</sup>。「森のミヒェル」とは、ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール (Wilhelm Heinrich Riehl 1823-1897)のことを指しており、さらに、この見出しには「渡り鳥のような研究者・ヴィルヘルム・リールは、森をめぐる集団的な夢をかき立て、自然保護のパイオニアとなっているが、しかし、また、ナショナリズムのパイオニアともなっている」という一文が書き加えられている。この記事を書いたヨッヘン・ビェルシェは、次のようにリールを紹介している。

ナチスは、森の多いドイツは、森の少ないフランスよりも優れた人種を産出するといったヴィルヘルム・リールの言説を引きついだ。ナチス・イデオロギーの代表者であるゲーリングやヒムラーたちは、森をゲルマン・ドイツ文化の正真正銘の象徴と位置付けた。そして、ナチス政策の基盤としての鉤十字の森という概念を人々に植え付け、映画『不滅の森』(Ewiger Wald)を製作した。森は、反近代的、国粋主義的、純血主義的、生物学的思考パターン of イデオロギー的暗号となったのである。

ビェルシェは、リールの森に関する言説とナチスの森のイデオロギー化との関係性を指摘するとともに、リールへの最近の新しい評価にも言及している。2006年にハルツ国定公園の管理機関が、リールを自然保護の先駆者として、彼の主張した「原生林の権利」(Recht der Wildnis)を取り上げて賞賛したというのだ。

リールは、19世紀に生きた文筆家であり、ジャーナリスト、小説家、社会学者、文化史家、音楽史家などとして広範な分野で活躍した。民衆の生活をフィールドワーク的な手法で調査・分析し、ドイツ民俗学の創設者とも言われている。こうした経歴をもとに、数多くの著作や講演集を残したが、今では、「ドイツ人と森」というテーマが取り扱われるときに必ずと言ってよいほど彼の名前が挙げられることで一般的に知られている。ことに、ナチスにおける森のイデオロギー化の先駆的思想家、「森のイデオログ」という文脈のなかで、リールの名前は不滅となっている。

「森のミヒェル」という呼称に表れているように、リールへの評価は一般的には揶揄と、いささかの侮蔑を含み、彼が独自に展開した社会論の時代錯誤性や、ナチスにおける森のイデオロギー化との関連への批判が圧倒的だが、現在また、エコロジカルな視点からの見直しがおこなわれているようだ。このように、リールへの評価は、今もってなかなか定まり切れない。リールの名

<sup>1</sup> Michel には「愚鈍な善人」、「愚人」などの意味がある。Vgl. Das Große Wörterbuch der deutschen Sprache in 10 Bänden. Mannheim 1999.

<sup>2</sup> Jochen Bölsche: Lebt denn der alte Holzmichel noch? In: Spiegel Online 2/2/2007.

前を人々が忘れかけようとするとき、移り変わる時代状況を背景にして、さまざまな分野から不死鳥のようによみがえる。「リールについて語るどころ、常にいさかひがある」<sup>3</sup>。これはリールの生涯と学問的業績をまとめたドイツのジャーナリスト、ヤスパー・アルテンボックム (Jasper Altenbuckum 1962~) が論文の序文、一行目に書いた文言である。そして、アルテンボックムは、「リールは崇拜され、弾劾され、利用されてきた」とリールへの評価を総括している。後述するリールをめぐる論議のなかで、さらに詳しく述べるが、彼は生存中にはベストセラー作家として国民の多くに認知され、賞賛され、バイエルン王国の学問的中枢の一翼を担っていると尊敬された。その没後には、ドイツ民俗学の中で神格化され、ナチスのプロパガンダとして利用され、第二次大戦後しばらくは忘れられた存在となっていたが、ドイツ民俗学会の分野で再びリール論争がおこり、今また、自然保護の分野のなかで、その名前が浮上している。

リールへの批判の多くは、ナチスによる森のイデオロギー化に寄与したと言われることによる。その起因となるのは、1854年に書いた『土地と人々』(Land und Leute)<sup>4</sup>におけるドイツ人と森に関する一連の主張によるものだ。「人間はパンのみでは生きられない。我々ドイツの民衆は森を必要とする。体を暖めるための木材をこれ以上必要としなくなっても、わが種族 (Geschlecht) には、精神を暖めるための緑の樹液と若芽に満ちた森がますます必要となるのだ」<sup>5</sup>と、リールは「畑と森」の章の中でドイツ人と森との特別な親和性を記述している。

『土地と人々』は、リールの代表作となった『ドイツ社会政策の基盤としての民衆自然史』(Naturgeschichte des Volkes als Grundlage einer deutschen Social-Politik) 中の第二巻目に出された本である。全4巻からなるこの長大な著作は、1851年に、第一巻として『市民社会』(Die bürgerliche Gesellschaft)<sup>6</sup>が出版され、それをさらに進めた形で『土地と人々』が出され、1855年には『家族』(Die Familie)<sup>7</sup>が、そして長い時間を置いて書かれた1869年の『旅の本』(Wanderbuch)で完結している。

本稿は、時代背景を含むリールの生涯を検討し、リール生前中から現代に続くリールをめぐるさまざまな論議と主要な論考を考察することにより彼の業績とその影響について探る。さらに代表作である『土地と人々』を検討し、「森と畑」の章から、リールが森のイデオログと呼ばれる要因となったリールの森に対する言説を分析し、リールの思想と全体像を考察するのが目的である。

## 2. リールの生涯とその時代

リールの思想を考察するうえで、時代背景を含む彼のバイオグラフィを概観するのは重要である。リールは、政治的にも社会的にも大きな転換期を迎えた19世紀に生き、独自の思想を形成し

<sup>3</sup> Jasper von Altenbuckum: Wilhelm Heinrich Riehl 1823-1897. Sozialwissenschaft zwischen Kulturgeschichte und Ethnographie. Köln, Weimar, Wien 1994, S. 1.

<sup>4</sup> Wilhelm Heinrich Riehl: Land und Leute. Neuausgabe der 10. Auflage. Waltrop, Leipzig 2010 (zuerst 1854).

<sup>5</sup> Ebd., S.60.

<sup>6</sup> Wilhelm Heinrich Riehl: Die bürgerliche Gesellschaft. Neuausgabe der 3. Auflage. Hamburg 2011 (zuerst 1851).

<sup>7</sup> Wilhelm Heinrich Riehl: Die Familie. Neuausgabe der 3. Auflage. Hamburg 2011 (zuerst 1855).

ていったからだ。彼は、どのような時代に生まれ、いかなる人生をおくり、どのような業績を残したのか。

リールの生きた 19 世紀という時代を政治から概観する。1813 年のナポレオン解放戦争後、1815 年にプロイセン王国とバイエルン王国を中心とした領邦国家同盟ともいうべきドイツ連邦が樹立された 8 年後の 1823 年に、中部ドイツのナッサウ公国でリールは生まれている。連邦樹立後もドイツ統一への道は開けず、経済的にも安定せず、ことに農村における下層農民の窮状は著しかった。1830 年のフランス七月革命やベルギーの独立の余波もあり、知識層の中での自由主義思想が成熟しつつあった 1848 年にはフランスの二月革命を契機に、農民をも巻き込んだ三月革命が勃発している。ドイツ各地における革命は、ほぼ挫折したが、全体としてみれば、旧勢力の残存、プロイセンの主導権の強化、さらには身分制社会の解体とドイツの近代的な社会形成の不可逆化という意味をドイツ近現代史に与えた<sup>8</sup>。革命後は、プロイセンを中心にさらなるドイツ統一を目指す動きが出てきたが、オーストリア＝ハプスブルク帝国のオーストリア地方だけを含む大ドイツ主義と、オーストリア＝ハプスブルク帝国のすべてを除く小ドイツ主義のいずれを選択するかという問題が顕在化している。しかし、1866 年の普墺戦争勝利において、オーストリアを除いたプロイセンを主導とするドイツ統一の母体が出来、1871 年のプロイセン国王ヴィルヘルム一世を皇帝とするドイツ統一につながった。リールは人生のほとんどを、中部ドイツのナッサウ公国や南ドイツのバイエルン王国で過ごしている。

社会的にみると 19 世紀の後半は、英仏などに後れを取っていた産業化・工業化と大都市化が急速に進んだ時代でもあった。ドイツの産業・工業化は、イギリスなどの先進国に比べて大きく立ち遅れ、本格的に始まったのは 1850 年代からだった。それまでのドイツは基本的に農業国であったが、プロイセンでは世襲隷農制の廃止と結婚の自由によって農村での人口が 1816 年ごろから爆発的に増加し、土地を持たない最下層労働者が農村に滞留していった。リールの生まれた中部ドイツは、伝統的均分相続制のもとに小農が多く、凶作などによる窮乏もその要因として、数多くの人々がアメリカ合衆国へと移住した。伝統的手工業者もまた、本格的な工業化の変革の波の中で、大きな危機を迎えている。道路の舗装化とドイツ全土にはりめぐらされた鉄道の発達は、原材料や製品の大輸送を可能とし、工業化を促進させる原動力となり、工業化の発展は村落に滞留していた農民を労働者として都市に流入させた。農村から都市への人口の流動化によって、大都市化もより一層進んだ。都市では市民とプロレタリアートという階層を中心にした新たな社会が勃興しつつある一方で、村落の経済は疲弊し、交通の発達も加味して村落独自の文化は均質化されていった。

そのような時代の大変革期のなかで、リールは啓蒙主義によって都市住民の中に深く浸透した自由主義を行き過ぎだと批判し、急速に進む産業化と大都市化に異議申し立てをし、異なる自然と歴史、文化に刻印されたドイツのさまざまな民衆の姿を描き出そうとした。彼は文筆家として新聞、雑誌の論説や書籍の執筆、また、大学の教授としての講義、言論人としての講演など、立場と表現の媒体を変えながら、社会や政治の変化に伴う諸問題、国民経済や歴史、文化についての独自の考えを主張した。さらに加えて、宗教、学校制度、音楽、演劇、地理、民俗、民衆史な

---

<sup>8</sup> 川越修：『世界歴史大系 ドイツ史 2』、東京、1996 年、328 頁。

ど多岐にわたるジャンルを、まさに「渡り鳥」のように縦横に行き来しながら、驚くほど数多くの著述や講演集を残している。

リールの生涯については、オーストリアの民族学者、ヴィクトール・ゲランブ (Viktor Geramb 1884~1958) による伝記<sup>9</sup>とアルテンボックムの論文が詳しく、その記述に沿ってまとめてみる。リールは 1823 年にナッサウ公国のビーブリヒ (Biebrich) に生まれた。ナッサウ公爵の城管理人であった父親のプロテスタントの合理主義とフランス革命から影響を受けたコスモポリタン精神への共感、そして、ナッサウ公国執事だった祖父の厳格な敬虔的信仰と土着的伝統への尊重という新旧相反する二つの時代感覚を自身の中に共存させたと言われる<sup>10</sup>。当初、マールブルグ大学で神学を志したが、聖職者として生きる堅苦しさに嫌気がさし、チュービンゲン大学をはじめとするいくつかの大学に移籍し、後年のリールの思想に影響を与えるようなさまざまな知己を得て<sup>11</sup>、哲学や政治、そして民衆の文化研究にその興味を移し、文筆家になる決心をしている。父親の死による経済上の理由もあって、大学在学中からジャーナリストとして活躍した。フランクフルト、ケルン、マンハイム、ナッサウ、ヴィーズバーデン、カールスルーエなど、多くの地方紙や雑誌に論説を書き続けた。1848 年の三月革命時には、「ナッサウ一般新聞」 (Nassauische Allgemeine Zeitung) の編集者に採用され、穏健なリベラル主義的立場をとりながら、立憲君主政治と議会制を目指した政治運動にも深く関与し、政治と社会問題をテーマにした論説を数多く書いた。ナッサウでの革命への希望と挫折をもとに、その政治的顛末を総括した『ナッサウ年代記』 (Nassauische Chronik des Jahres 1848) を、1849 年に書いたあと、リールの政治的論説は激減し、政治から距離を置いた社会的、文化的テーマを扱った論説が主流となっていることが、ベルンハルト・シュミット (Bernhard Schmidt) の詳細な分析からわかる<sup>12</sup>。1848 年の革命を「ぞっとするような危険がいつぱいの日々でありながら、しかし、また、素晴らしくもあった」と書きつつも、リベラルなリアリストだった彼のこうした錯綜する感情は、革命後 1 年で現実政治への懐疑的態度へと一変させた<sup>13</sup>。リールは、革命は社会的混乱を引き起こすだけだったとし、「もともと身につけていた保守性が、1848 年の革命を通してより自覚的に強くなった」<sup>14</sup>と、後年述懐している。ナッサウでの革命体験は、彼の政治や社会観に保守性への回帰という新たな方向性を持たせたといえる。リールは、1850 年にコッタ出版社の「アウクスブルク一般新聞」 (Augsburger Allgemeine Zeitung) に請われて移籍した。コッタ出版社は、三月革命前期のドイツ出版事業における近代的大企業のひとつであり、創業者ヨハン・コッタ (Johann Friedrich

<sup>9</sup> Viktor von Geramb: Willhelm Heinrich Riehl Leben und Wirken 1823-1897. Salzburg 1954.

<sup>10</sup> Altenbockum, Wilhelm Heinrich Riehl 1823-1897. S. 12f.

<sup>11</sup> 例えば、Ernst Moritz Arndt (愛国詩人、歴史家 1769-1860)、Moritz Carriere (小説家、哲学者 1817-1895) などが挙げられる。

<sup>12</sup> Bernhard. J. Chr. Schmidt: Katalog der Riehl'schen Zeitungsaufsätze. Die Jahre 1841-1853.einschl.umfassend. In: NASSAUISCHE ANNALEN, Wiesbaden 1914.

シュミットはリールの論説を、掲載紙、掲載日時、署名の有無などを入れ込んだ詳細なカタログとしてまとめており、リールの書いた論説の対象領域の多彩さと興味の時系列的変化がわかる。欄外には、それぞれの論説と後年に執筆した『市民社会』、『土地と人々』、『家族』との関連をも記述している。シュミットによるこのカタログをゲランブは大いに評価している。

<sup>13</sup> Altenbockum, S. 26.

<sup>14</sup> Willhelm Heinrich Riehl: Religiöse Studien eines Weltkindes. Stuttgart 1894, S. 468.

Cotta 1764-1832) は親交のあったゲーテやシラーなどの著作を多く出版して発展を続けた会社であった。アウグスブルク一般新聞の対象読者をリベラルかつ知的保守市民に向けるといった新編集方針に共鳴したリールは、自分の思うところを存分に書くことが出来た。革命を機にして、リールは、議会における政党間の空論的議論に懐疑を抱き、「事実」と「現実の暮らし」に、その興味を移していった<sup>15</sup>。シュミットのカタログを見ると、この新聞で書いた論説 215 本の内、政治問題はナッサウ一般新聞とは異なって 18 本と少なく、社会問題は 51 本、文化関係が 98 本と飛躍的に多くなり、鉄道、新技術、環境問題などに関する論説も 24 本にのぼっている。ここで重要なのは、アウグスブルク一般新聞における論説に、後年出版することになる『土地と人々』や『市民社会』に書かれる記述が多く見られることだ。1850 年にはすでに、コッタ社とリールの間の本の出版構想についての書簡が交わされ、後年出版された著作の下敷きになった論説が多いのは説明がつく<sup>16</sup>。そのような経緯で、まずは、1851 年に『市民社会』が出版された。『市民社会』は、リールの死後の 1907 年までに 10 版を重ね、1854 年の『土地と人々』は 2010 年までに 10 版、『家族』は 1882 年までに 9 版を重ねた<sup>17</sup>。ドイツ国内だけではなく、ロシアを含むヨーロッパ諸国でも翻訳されている。まさに、当時の大ベストセラー作家であり、彼が書いた多くの著作は主に都市に住む教養人に読まれ、圧倒的な共感と支持が寄せられた。1854 年にバイエルンに招聘されたのも、後の国王となるマキシミリアン二世が、『土地と人々』に感銘を受けたからだ。プロイセン王国のベルリンに対抗して、ミュンヘンを文化、学問と政治の中心都市としようとするマキシミリアン二世の意向で、多くの学識経験者が招聘された。その中であって、リールには文化都市構想を秘めた半官半民の新しい新聞の創設を任せしたが、政治的力学の抗争により発刊は困難を極め、結果的に、リールはミュンヘン大学で国家学や統計学、文化史を教える教授としての地位を得ることとなった。学長も二度務めている。彼は、大学の休暇を利用し、14 年の間にドイツの諸都市で 487 回の巡回講演を開催し、18 万人がこれを聴講したということだ<sup>18</sup>。巡回講演を行う傍ら、ドイツの各地方の文化や歴史、経済、そして、民衆の実情をつぶさに観察したといわれる。

マキシミリアン二世の要請により、1857 年に『プファルツ人 ラインの民衆像』(Die Pfälzer Ein rheinisches Volksbild) を刊行しているが、この本にはプファルツの住居や言語、食事から政治的、社会的傾向を含む民衆像が描かれ、民俗学的様相を帯びている。1858 年には、「学問としての民俗学」(Die Volkskunde als Wissenschaft) というドイツ民俗学における記念碑的な講演をし、リールのドイツ民俗学会における地位を不動のものとした。後期のこうした民俗学的、文化史的な著作や講演のほか、リールは市井の人々を題材としたいいくつかの小説も残している<sup>19</sup>。最晩年は、バイエルン国立博物館館長とバイエルンの古代遺産と記念碑の管理監督官となり、1883 年には貴族の称号も与えられている。74 歳で没するまで、ジャンルにとらわれない分野横断的な

<sup>15</sup> Altenbockum, S. 33.

<sup>16</sup> Ebd., S. 33f.

<sup>17</sup> 再版数に関しては諸説ある。

<sup>18</sup> 飯塚信雄：『世紀転換期ドイツの文化史家たち(1)』明治大学教養論集、東京、2000 年、17 頁。

この回数は、リール自身の言葉によるものだという。この数字についても諸説ある。

<sup>19</sup> リールの小説は、第二次大戦中の 1942 年に『リール作品集』(森永隆訳)として白水社から出版されている。この作品集には「町の喇叭手」や「漂泊の乙女」などの小説が収録されていて、市井の人々の素朴な暮らしが描かれている。

仕事で、その人生を生き切ったと言える。

### 3. リールをめぐる論議

前述したように、リールは当時であって大きな社会的成功を収めた人物と言えるが、彼への評価は、生前中から現代に至るまで、時代の合わせ鏡のように賛美と批判の両極で揺れ動き、未だにその評価は定まっていない。時代を追って、リールをめぐる論議と主要な論考をたどってみる。

リールの生前中、その名声がドイツ内外で大きく広がり称賛されながらも、同時に激しい批判にさらされていた。ほぼ同時代を生きた歴史学者のハインリヒ・トライチュケ (Heinrich von Treitschke 1834-1896) によるリールの『市民社会』への糾弾である。彼は 1859 年に、大学教授の資格取得論文として、『社会学』(Die Gesellschaftswissenschaft) を書き、そのなかでリールを批判した。リールの代表的著書である『市民社会』は、『土地と人々』と相互に補完しあっているので、『土地と人々』を考察するにあたり、『市民社会』の内容を簡単にまとめておく。この本は、1848 年革命のわずか 3 年後、リールが 28 歳の時に発表されている。

リールが『市民社会』で描こうとしたのは、旧時代からの「貴族」、「農民」、「市民」に加え、新しい身分としての「第四身分」による身分的・共同体的な社会像である。リールは、序文の中でこう述べている。

市民社会は政治社会とは別の意味があり、区別されるべきだ。狭い意味での社会も、実際には国家 (Nation) という概念を超えることがある。それゆえ、この本では、国民生活の上部構造にある国家権力についてのみ語るのではなく、部族 (Stamm) や出自 (Wurzel) について、民衆の性質と慣習と職業について語ろうと思う。為政者はこれらを知った上で社会政策を行うべきだ。政治的民俗学は現代の最も独自の財産であり、何千もの闘いや苦難から生まれた源泉となるものであり、また、我々の政治的将来の担保となるものだ。<sup>20</sup>

さらに、プロイセンを例に挙げて「プロイセンの領主は大きな政治的権力のもとで、警察国家や公務員国家を作ったが、国家統一という旗印のもとで、自然発生的に出来上がった民衆グループの権利を過少評価した」<sup>21</sup>と批判している。この民衆グループこそが「身分」であり、リールは、「中世の身分制度はとっくの昔に息絶え、葬られている」としたうえで、しかし、「近代的立憲国家は、その封建的身分制度国家から生じ、封建制度的身分にとって変わった新たな身分というものが出来ている。だからこそ、社会政策は、それぞれの身分に応じた民衆の研究に基づいた政治であらねばならない」<sup>22</sup>と書いている。リールが分析した諸身分の中でも、「第四身分」<sup>23</sup>の概念は特異だ。彼の考えた第四身分とは、自然史的に生成された貴族や農民、そして定住する市民といった階層には属さないプロレタリアートを含む職業集団である。そして、単に職業による分別だけではなく、各階層にも「墮落した」という意味合いで、精神的プロレタリアートがいる

<sup>20</sup> Riehl, Die bürgerliche Gesellschaft. S. 10.

<sup>21</sup> Ebd., S. 13.

<sup>22</sup> Ebd., S. 14.

<sup>23</sup> Ebd., S. 247ff.

と考えた。リールの考えたプロレタリアートは、マルクスのいうところの資本家に搾取される労働者といった階級的意味合いとは異にし、定住する場所を持たない根なし草というネガティブなイメージをもつものであった。また、リールにあっての身分(Stand)とは、中世的な位階・特権・特殊な政治的権利に結合する概念で、一種の社会的グループを意味し、それぞれ財産と仕事と風儀(Sitte)を持ち、門地出生に結合するものだった<sup>24</sup>。リールはこれらの身分を分析し、貴族と農民を「固執の勢力」(Die Mächte des Beharrens)<sup>25</sup>、市民と第四身分を「運動の勢力」(Die Mächte der Bewegung)<sup>26</sup>と分けて位置づけ、それぞれの特性を論じた。そして、その二つの勢力は相互排他的なものではなく、市民社会の中でより良く統合されたものでなければならぬとした。リールはこうした身分のなかでも、農民は革命による混乱にも動ぜず、ドイツ民衆の文化と秩序を保持する力を持ち、近代的国家の平準化された社会の中で、物質主義と工業優先主義による墮落から免れている階層と高く評価した。「農民こそが民衆文化史と分かちがたく結びあったリールの理想とする「自然の民」(Naturvolk)という定義にかなっている」<sup>27</sup>と、考えたからだ。リールの市民社会論は、いわば、旧時代の身分制社会を新時代の市民社会に投影させ、融合させようとしたものと言える。トライチュケは「社会的生活における個々の不均質は、国家政治の統一を妨げる」としている。それは、リールの「国家構想は民衆の自然史に起因すべきであり、ここでは、さまざまな土地に住む民衆の調和した多様性が反映されるのだ」<sup>28</sup>というものとは、まったく相いれなかった。トライチュケは、リールがドイツ統一に必要なだと考えたドイツの特殊性や地方分権性を時代遅れとみなし、さらに社会的領域における問題は、リールの考える旧弊な保守的国家学では解決され得ないとした。そして、リールの考えた国民概念(Volksbegriff)は虚構だとし、リールの国家概念の定義不備と体系的不明瞭さをも非難した<sup>29</sup>。リールとトライチュケの対立には政治的な背景がある。トライチュケは小ドイツ主義のプロイセン学派の歴史家として、地域中心主義を超えて国家は統合された社会の制度的役割を持つものとしたのに対し、リールは大ドイツ主義、連邦主義、さらには地方分権主義の立場に立っていた。リールの生涯にわたる中央集権嫌いと官僚主義嫌いは、プロイセンに対する姿勢でもあった。

長らく忘れられていたリールの名前が、歴史の中で再び大きくクローズアップされたのは、第一次大戦後にドイツ国内で大きく広がった「フェルキッシュ運動」においてであった。フェルキッシュ(völkisch)の語源となるVolkという概念には、国民や民衆や民族、一地方の住民全体を示すものが内包されている。「フェルキッシュ運動」におけるフェルキッシュを、その運動内容から訳するならば民族至上主義的運動ということになるだろう。ドイツ人歴史学者のジョージ・モッセ(George Lachmann Mosse 1918~1999)は、著書『フェルキッシュ革命』<sup>30</sup>で、フェルキ

<sup>24</sup> 千代田謙:『W・H・Rの社会史観』、史学研究 第68号、広島、1957年、2頁。

<sup>25</sup> Riehl, Die bürgerliche Gesellschaft. S. 41ff.

<sup>26</sup> Ebd., S.177ff.

<sup>27</sup> Heinz Siegfried Strelow: Wilhelm Heinrich von Riehl(1823-1897). In: Politische Theorien des 19.Jahrhunderts. Konservatismus Liberarismus Sozialismus. Berlin 2002, S. 204f.

<sup>28</sup> Altenbockum, Wilhelm Heinrich Riehl 1823-1897. S. 88.

<sup>29</sup> Strelow, S. 204.

<sup>30</sup> ジョージ・L・モッセ:『フェルキッシュ革命 ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』、植村和秀・大川清丈・城達也・野村耕一訳、東京、1998年。The Crisis of German Ideology. Intellectual Origins



ッシュ思想は、ヒトラーの民族社会主義のとした目標や方向に本質的特徴を与えたと主張している。彼はこの本の中で、フェルキッシュ運動のイデオロギーの基礎をロマン主義に置き、古代ゲルマン人の発見から人種主義に至る時代、そして 1873 年から 1918 年までをフェルキッシュ・イデオロギーの制度化の時代、さらには 1933 年のナチス政権樹立までの三つの時代に分けて検討している。そして、第一章「ロマン主義から人種主義までの時代」の中で、リールの書いた『土地と人々』と『市民生活』こそがフェルキッシュ思想の模範となり、人間と社会に関するより完全にまとめられたフェルキッシュ的な見方を構築したと指摘している。そして、リールの思想をこう分析している。

リールは『土地と人々』において民族の有機的性質を論じた。それは、生来の風土と渾然一体になった場合のみ獲得されるものだ。彼はドイツの様々な人間集団を居住している風土から分析した。賞賛される自然環境の真正さは、人間に誠実、完全性、素朴といった性質を生じさせ、自然に根差した民族の文化は、機械的・物質主義的な文明の対極にあるものだとした。リールは人為的なもの全てを拒否し、近代は人間によって考案された真正さの欠けるものであり、人々に不和を起こさせる要因になっていると主張した。真正さに意味を与えるのは、ただ生きた自然だけなのである。リールの考えた自然の真正さは、民族にとって生命力と歴史的意味の両方が注入されているものに他ならなかったからだ<sup>31</sup>。

さらに『市民社会』を取り上げ、「リールの望んだ社会は、本質的に階層秩序的であり、中世の諸身分を模造したもので、中世の時代へのロマン主義的な郷愁の念を反映したものであった」<sup>32</sup>と筆を進めている。モッセは、リールの考えた市民社会での諸身分を検討し、リールにとってプロレタリアートは、諸身分の体系的統合から排除される定住しない根なし草で、既成の秩序に対する反逆者であり、その中にユダヤ人をも含めたとした。「大都市を支配しているのはこうしたプロレタリアートであり、大都市とプロレタリアートは、民族の領分を危うくしている」<sup>33</sup>というのがリールの主張であり、彼の思想は、急激に変化する社会の中で安住の地を見出したい人々には魅力的に映り、それがフェルキッシュ運動への影響力を持続化させた要因になっていると結論づけている。

モッセによる分析の是非はともあれ、リールの思想は 1920 年代を境に多くの人々の間で、再び広く受け入れられた。俗に言う「リール・ルネッサンス」である。ゲランブによれば、1920 年にシュレーゲンのある婦人グループを通して「リール同盟」(Der Riehl-Bund) が設立されたということだ。同盟については、ゲランブ自身もその存在を数枚のパンフで確かめるのみで、その内容が家庭婦人向けであるのがわかるだけで詳しい会則などは不明としている。しかし、リールへの関心が、一般庶民の中で復活したことは確かだとしている<sup>34</sup>。そして、リール生誕 100 年

---

of the Third Reich. New York 1981.(本稿で使用する日本語への翻訳文献は原則そのままとする)

<sup>31</sup> モッセ、『フェルキッシュ革命』、36~37 頁。

<sup>32</sup> 同上、37 頁。

<sup>33</sup> 同上、41 頁。

<sup>34</sup> Geramb, Wilhelm Heinrich Riehl. S. 544f.

にあたる 1923 年には、リールに関する出版物が数多く出された。その内容は、たとえばリールが書いた『家族』<sup>35</sup>についての考察であったり、リールの宗教観の研究であったり、必ずしも民俗学の分野にとどまっていたりはしない<sup>36</sup>。また、1923 年に出版されたジグモント・シュタング (Sigmund Stang) の著作では、「リールはドイツ初めての文化史家」と讃えられているという<sup>37</sup>。ナチス時代の 1935 年には、ドイツ民俗学の中で「リール賞」が創設され、第一回リール賞の受賞作品は、後年、オーストリア民俗学会長となったレオポルト・シュミット (Leopold Schmidt 1912-1981) の『ウィーン市の民俗学』だった。その他、ナチス時代には、ドイツ民俗学の分野でリールについての非常に多くの学位論文が発表されている。また、一般家庭向けにリールの著作の縮刷版も編集され、彼の思想が広くいきわたった<sup>38</sup>。

戦後も、リールについての研究と論議は単発的ながら続いていたが、70 年代末期、ドイツ民俗学の中で、重鎮であったハンス・モーザー (Hans Moser 1903~1990) の論文を引き金として、「リール論争」が湧き起こった。ドイツ民俗学会は 1891 年に創設され、民俗学年報が定期的に刊行されていた。しかし、ナチスの体験を経て、戦後は機関紙が出されず、長い時を経た 1978 年に『民俗学のための年報』<sup>39</sup>として新しく刊行されることとなった。新年報の序文は、ナチスとドイツ民俗学との関係、ひいては年報刊行についての歴史的経過を述べつつ、ドイツ語圏における民俗学の専門機関紙の必要性を訴え、新発刊に至った趣旨が書かれている。そして、リール研究で知られたモーザーの論文が寄稿されたのを誇りに思うとし、この論文によって、リールへの誤った評価に最終的決着がつけられると述べている。モーザーの論文『ヴィルヘルム・ハインリヒ・リールと民俗学』<sup>40</sup>は、副題「あるひとつの学問史的訂正」に示されているように、リールの代表的著作を中心に、その内容と当時の実態とを細かく比較し、分析することによって、リールのドイツ民俗学への学問的実績の正確性に疑義を申し立てたものだ。モーザーは、Volkskunde (民俗学) という言葉を使ったのはドイツ民俗学の祖と言われるリールが初めてではなく、すでに先行研究者達がいて、彼は単にそれを見知った程度に過ぎなかったと指摘した。そのため、リールは民俗学概念についての真の理解をしていたかも疑わしく、国家学や社会政策の枠組みの中で民俗学を捉えようとしていただけだと分析している<sup>41</sup>。さらに、リールが国王の要請でバイエルンの地域と民俗研究を編集した『バヴァリア』(Bavaria Landes-und volkskunde des Königreiches Bayern 1860) は、フィールドワーク的手法で資料集めをしたのはリール自身ではなく、早世した仲間の学者、ヨーゼフ・レントナー (Josef Friedrich Lentner) であったことにまで言及してい

---

<sup>35</sup> リールは著書『家族』の序文で、「この本は、『ドイツ社会政策の基盤としての民衆自然史』の最も重要な要となるものだ。というのも、私は『土地と人々』や『市民生活』のなかでさまざまなグループを論じてきたが、家族こそ民衆生活における根源的なグループだからだ」と述べている。また、「男性と女性における社会的不平等性は、ひとつの永遠なる自然法則だ」とも主張していて、リールの女性への保守的姿勢が強く印象づけられる。Riehl, Die Familie, S.6.

<sup>36</sup> Geramb, S. 545ff.

<sup>37</sup> Ebd., S. 547.

<sup>38</sup> Ebd., S. 563f.

<sup>39</sup> Jahrbuch für Volkskunde Neue Folge 1978. Würzburg, Innsbruck, Fribourg 1978.

<sup>40</sup> Hans Moser: Willhelm Heinrich Riehl und die Volkskunde. Eine Wissenschaftsgeschitliche Korrektur. In: Jahrbuch für Volkskunde Neue Folge 1978.

<sup>41</sup> Ebd., S.11ff.

る。リールの有名な講演の「学問としての民俗学」も論拠に欠けたものと指摘し、あらゆる分野を多面的に書こうとする者は間違いを犯しがちだし、文章のレベルも低い<sup>42</sup>と酷評している。そして、リールがドイツ民族学への学問的貢献をしたという今日まで続く厄介な思い違いは、必ず一度は問題視しなければならなかったと結んでいる。モーザーの論文に対し、翌年 1979 年の年報では、「民俗学と 19 世紀」という特集が生まれ、それにはクラウス・グート (Klaus Guth) の『リールに終わりがいいのか?』、ヘルゲ・ゲルント (Helge Gerndt) の『リールとの決別』といった論文が寄せられている。この一連のリール論争は、ドイツ民俗学のナチス問題克服という課題を含んでいた。特異な歴史的経過をたどったドイツ民俗学を、ナチス民俗学培養の功労者といわれるリールとの決別によって、現代的エスノロジーへと転換させたい強い願いがあったと言える。

そして、時を経た 1994 年に、アルテンボックムが民俗学の分野を超えて、リールのバイオグラフィと学問的業績についての本格的な研究論文を発表している。彼は、ナチス民俗学の系譜にあるグランブによるリール伝記は、リールへの無批判の賛美で国粹主義的な誤解を生んでいるとし、リールのバイオグラフィを独自の見地から分析することにより、リールの思想形成の経過をたどった。また、リールの社会理論の基礎をなす自然にむすびついた民衆の文化という概念を、さらには民衆における国家と社会に対するリール独自の解釈を、『市民社会』と『土地と人々』を中心にしたさまざまな著作や講演集から詳しく考察している。「質より量を優先させ、書くことの熱狂に取りつかれた三文文士」<sup>43</sup>と揶揄され、「非学問的・非体系的」、あるいは「ナチス民俗学の培養基」とレッテル張りされたリールの思想を、アルテンボックムはニュートラルな視点に立って、いままで研究対象にされなかった彼の学問的業績を分析することによって、根本的に見直そうとした。「リールは、自分を（時代の）レポーターと認識しており、自分の学問的業績の不完全性も、時代錯誤性も自覚していた」<sup>44</sup>というリールの新しい像も描き出している。また、歴史学の中で日常史や生活世界への転換といった視点が出てきた 80 年代以降から民衆のリアルな姿を書き続けようとしたリールが取りざたされるのは不思議なことではないと分析している。そして、リールの学問的業績についてひとつの結論を導き出している。

リールはなんらかの方向への先駆者ではなく、歴史的記述を新たに理解し、異なる分野をひとつに統合しようとする文化史的試みのパイオニアであった。リールの社会論は確かにトライチュケが指摘するように欠陥も多く、あるひとつの学問体系の設立には成功しなかったが、彼の学際的取り組みは、文化史を統合的学問として発展させるきっかけになりえるものだった。[・・・] リールは後期啓蒙主義の国家学危機と 19 世紀末の歴史学での深刻な争いにおける過渡期の人物だった<sup>45</sup>。

近年では、政治理論の分野でもリールに関する論文による新たな見直しがされている。2002 年に出版された『19 世紀の政治理論』<sup>46</sup>の中で、ハインツ・シュトレローフ (Heinz Siegfried Strelow 1965~)

<sup>42</sup> Moser, S. 65.

<sup>43</sup> Strelow, S.193.

<sup>44</sup> Altenbockum, S. 9.

<sup>45</sup> Ebd., S.7.

<sup>46</sup> 脚注 24 参照。

は、リールを保守主義の論客の一人として考察した。アルテンボックムと同様の手法で、バイオグラフィから筆を起し、『市民社会』と『土地と人々』に見られる思想を分析している。

リールは半ば学問分析的に、半ばイデオロギーで粉飾した多面的な民衆概念を発展させたが、国家理論を発展させたわけではなかった。彼の国家理論は、自然と歴史における有機的な統一というものであり、国益最優先思想の考えとは異質のものだった。歴史学を、単なる国家活動の歴史についての学問という桎梏から解放し、文化史と社会学をも統合し、さまざまな視点を持った分野へ拡大させようとした。リールは決して民俗学を確立しようとしたわけではなかった。フィールドワーク的技法を通して民衆の多様な暮らしを実証しようとしただけだ<sup>47</sup>。

リールをめぐる受容の歴史と、主要な論議・論考は上記の通りであるが、「はじめに」で指摘したように、今日、リールは森のイデオログといったステレオタイプの像で捉えられているのが一般的だ。その源泉となった『土地と人々』とは、どんな内容を持つ本なのか？リールは森について一体、何を語ったのか？次の章では、それらを考察しながらリールの思想を読み取り、森にたいするリールの考えとその影響について、先行研究の例を引きながら述べる。

#### 4. 『土地と人々』の考察

『土地と人々』は、初めて読もうとする者に戸惑いを与える。まず、目次のたて方に方向性がなく、なにについて書こうとしているか容易には推測出来ない。内容を読み進めてゆくとさらに困惑する。大学における学部についての考察と提言があるかと思えば、辺境と呼ばれる地方の非常に細やかな暮らしの描写がある。重複も多く、対象とするテーマが多様で、脈絡がないかのようにみえる。リールは序文で、本書執筆の動機をこう述べている。

かつての君主は、自分の領地を城から城へとくまなく渡り歩くことで、その土地と人々の実態というものを把握し、政治を行った。そうした習慣が途絶えた今、馬車で遍歴した君主に変わり、その土地の歴史的、国家学的、国民経済に関する研究を、民衆との直接的な交流を通して、政治に関心のある作家たちがやるべきだろう。そのため、私は自ら進んで「歩く遍歴者」(Fußwanderer) となって、ドイツにおける農民を中心とした民衆の暮らしを研究した。私の研究は、農民層だけではなく貴族層などの身分的各層への研究へと広がる結果となり、期せずして『市民生活』という社会の全体像を示す本になった。そういうわけで、『市民生活』では身分というものの中での民衆を描いたが、『土地と人々』は、民衆そのものと、彼らが住む自然という場所的特殊性との関連について研究するものだ。民衆に対するこうした自然史的研究は、おのずから社会学に結び付き、それによって社会政策にたどることが出来るだろう<sup>48</sup>。

この序文からも、『土地と人々』は『市民生活』での社会像を具体的な表象によって補完する目

<sup>47</sup> Strelow, S. 205f.

<sup>48</sup> Riehl, Land und Leute. S. 13f.

的にあるということがわかる<sup>49</sup>。リールが一貫して描き出そうとしたのは、数字偏重の統計学に頼らない、それぞれの土地と風土に刻印された歴史と文化を持つ民衆の現実の姿であり、彼はそれが社会政策に反映されるべきだと考えた。そのため、リールの言う民衆の自然史的、文化史的研究は、扱うテーマが多彩にならざるを得ないのだ。この序文は、トライチュケによるリール批判への間接的な回答となっていることが推察される<sup>50</sup>。

森についての言説は後述するが、この本の主題ともいえるべき「ドイツ民俗学における三分割」(Die Dreiteilung in der Volkskunde Deutschlands)の章を、最初に考察する。民衆にまつわる自然史的、歴史的、政治的状況分析をしたこの章によって、『土地と人々』は、しばしば「ドイツ初めての人文地理学書」<sup>51</sup>と言われる所以となっているからだ。リールの著作の中でも、非常に高く評価された本でもある。リールは、ドイツの大地を大きく三つに分け、国土の三分の一を占めるプロイセン王国を中心とした地域を北部低地ドイツ(北ドイツと表記)、130マイルに及ぶ多くの小国家を抱える山岳帯を中部山岳ドイツ(中部ドイツ)、そこからアルプスまで上昇を続けるバイエルン王国を中心とする地域を南部高地山岳ドイツ(南ドイツ)と名づけた。

三つの地域のそれぞれの地形、気候、河川の特徴、森林の樹木種、植物相などの自然条件の特徴を描き出し、そうした自然環境によって育まれた民衆性や、歴史的発展過程、政治状況を詳細に記述しながら比較している。民衆への観察は、話される方言、自殺率、嗜好する酒の種類や人口密度の分析にまで及んでいる。その中でも、リールは地理学的、気象学的な分析に大きな力を注いでいる。それらの考察の結果、砂丘や湿原、沼地、原野のような荒れた土地が多く気候の厳しい北ドイツと、同様の自然環境にある高原や高い山岳を含む南ドイツでの植生は良く似ており、放牧・牧畜農業や三圃制農業なども北と南に見られる形態だと指摘し、それに反し、中部ドイツでは温暖な気候のもとでの輪作可能な耕作の多様性が見られるとしている。そして、北ドイツのリューゲン島と近隣の島々を例に挙げながら<sup>52</sup>、他の世界との接触が困難な辺境の地域では、歴史的に培われた独自の文化や方言が色濃く残り、異なる気候は、さまざまな食習慣、独特な生活様式や慣習を生み出すとしている。文明に犯されず、自然に溶け込んで暮らしている民衆という意味合いを持つ〈自然の民〉は、ドイツの辺境と呼ばれる地域に居住し、貧しいが素朴さと野生的たくましさを持つと、リールは分析した。彼らこそ、リールが理想とする民衆の姿である。また、北と南ドイツの民衆には歴史的に他の部族との激しい戦いを通して培ってきた抜きがい郷土への誇りが共通してある一方、ナポレオンによる統治という時代はあったものの分裂の歴史をたどった中部ドイツの民衆には郷土への誇りというものがないと、彼は考察している。そして、北と南ドイツの民衆性に類似性があるが、中部ドイツは北にも南にも属さず、ドイツ的特性が激

49 リールは、「本来、『土地と人々』は『市民生活』の序文として書くべきだった」と記述している。Riehl, Land und Leute. S. 172.

50 リールは、自分の短編小説集の表題『Aus der Ecke』を借りて、「私は片隅から世界を見ているに過ぎない」として、トライチュケへの直接的な反論はしていない。

51 Geramb, S. 221.

52 リューゲン島の描写は S.161~169 の 9 頁に及んでいる。章の構成においては著しくバランスが悪いが、島の地形、方言、民族衣装、基幹産業であるニシン漁、土俗的信仰と生活習慣などについて事細かに記述していて興味深い。島の漁師からの聞き取り調査も交え、フィールドワーク的民族学的手法がかいまみえる。

しくぶつかり合う通過地点であって、ドイツのあらゆる民衆生活の特徴が押し込まれ、その民衆の特性を一概に語るのはむずかしいとした。

こうした民衆に関する考察から、リールはさらに各地域の政治的状況分析へと筆を進めている。北ドイツと南ドイツでは、その歴史的経過の結果として大小の領邦国家が成立し、通商と学問に秀でた近代的君主の権力のもとに産業促進がなされ、その視野を世界に向けて大きく広げ、中央集権的体制が整いつつあるとしながらも、北ドイツでは政党間の争いが今なお続き、南ドイツでは教皇至上主義者や僧侶の権力が強すぎるという問題を抱えていると指摘している。そして、リールは出身である中部ドイツについて、北ドイツと南ドイツとを比較しながら、多くの紙面を割いて分析している。歴史的にみると中部ドイツはローマ文化との融合という形で文化的に爛熟し、18世紀にはワイマールを中心とした文学や芸術の分野で一時代を築いた。その半面、政治的には分断の歴史を繰り返し、小国家が乱立する状態となり、政治的統一への方向性を失い、政治そのものも無力化し、プロイセンとオーストリアという二つの大国に挟まれながら、国際政治とも無縁であることに、リールは歯がゆい思いを記述している。

次に、リールは「集中化した土地」(Zentliertes Land)と、「個別化した土地」(Individualisiertes Land)という章をたてて、ドイツの民衆性を捉えようとした。「集中化した土地」には、まだ身分制の名残があり、ひとつのまとまった民衆性を持つ住民が住み、「個別化した土地」には、身分制という区分への理解を完全に失くし、バラバラになった住民が住んでいる。リールは「ドイツの民衆性における二つのはっきりした対比を一つの例としてここに示したい。つまり、粉々に砕かれた民衆生活をおくる中部ドイツのラインガウの住民と、南ドイツの伝統的文化を真に継承するひとつのまとまりのある南バイエルンの住民を比較し、検討する」<sup>53</sup>として、それぞれの農民の像を、具体的に個々の章で論じている。ドイツの土地と人々を三つに分けて論じてきたが、ここでは、ドイツにおける二つの「民衆性」を論じる構成になっている。出身地である中部ドイツにあるラインガウも、後半生を過ごした南ドイツの南バイエルンもリールにとっては縁の深い土地である。しかし、ことにラインガウでの描写と考察は精緻を極めていく。温暖な土地でのワイン栽培で富を得たラインガウの農民も過剰生産と天候に左右されるワイン醸造の不安定さなどにより転機に立たされ、現在ではジャガイモなどの耕作に移行しているものも多い。「ラインガウのワイン農民は、ブドウの栽培とワイン醸造という産業と商売とを同時に行っているが、そのどれもが真に成功をしているとは言い難い。とことん細かく分割された土地で、富める者と貧しい者が混在している」<sup>54</sup>と観察し、貧しい層はプロレタリアート誕生の温床となっていると指摘する。その民衆性の特徴として、リールは、ワイン文化に慣れ親しんで来たラインガウの人々にはワインにまつわる逸話や格言も多く楽天的だ。しかし、農民は都市住民化され、独自の民族衣装も方言もすでに喪失してしまっていると考察している。また、ラインガウの人々の民衆性で特筆すべきなのは、小国なるがゆえに、よそ者を排除するような行きすぎた地域中心主義が見受けられることだとしている。そして、リールは南バイエルンへと目を転じる。ここは南ドイツの中でも、山岳に遮られた溪谷の中をさまざまな河川が四方八方へと流れ、また、冷涼な気候を持つ高原地

<sup>53</sup> Riehl., *Land und Leute*. S. 177.

<sup>54</sup> Ebd., S. 196.

帯をも抱えている。こうした土地は外界から遮断されているので、他の地域との交流も途絶えがちとなる。だが、それだからこそ、それぞれの地域に古い習俗や方言がしっかりと残っているとされている。人々は代々相続した土地に根を張り、17世紀が19世紀に直結するような風俗習慣の中に生きている。政治的には保守的で、カトリック聖職者の力も強く、民衆の信仰もゆるぎない。彼らは粗野に見えるが忍耐強く、素朴な木彫などの美しい手工芸などの民衆芸術と文化の中に生きている。リールの志向する民衆の姿は、文明化してしまったラインガウの人々よりも、辺境ではあるが、豊かな民衆文化が残る南バイエルンにあった。こうした二つの地方への視点は、ドイツそのものにも通じる。北ドイツや南ドイツの辺境地帯に住む貧しく素朴で野生的な人々への共感と、彼らが保持する民衆生活と文化への崇敬である。

序文で述べたように、リールは民衆の姿を真に理解するための研究をすること自体が、社会政策につながるのと観点にたって、さまざまな土地に住むさまざまな人々の姿を描写しようとした。そして、自然や歴史の中で培ってきた民衆性と独自の文化を、急速に近代化してゆく市民生活に融合させることの必要性を訴え、新たな社会像を構築しようとした。それが、『土地と人々』の大きな特徴である。また、『土地と人々』では、第二版で新たに付け加えられた「四つの学部」の章で、「国家学」創設の重要性を主張している。当時の大学には、中世から続く神学、法学、医学、哲学の四つの学部しかなかった。リールは、それらの学部は古い形式のまま硬直化し、学問的閉塞状態に陥っていると批判している。学部の再編を図らなければ、学問は時代の変化と要請には答えられないとし、神学部、哲学部を残し、新たな二つの学部の新設を訴えた。「国家学」と「自然科学」の学部である。当時、目覚ましく発達した地理学などを含む自然科学部の中に医学部を、国家学部の中に法学部を入れ込む、新たな「四つの学部」の提案だ。そして、新たに創設しようとする「国家学部」において、リールは独自の理論を展開している。法学部と哲学部に分断されていた国家学を一つに統合し、そのなかでは、民衆が最高位に来るような学問、つまり、地域研究や民俗学研究が最優先されるべきだとした。その他、「教会の対立」、「地方分権主義と大国」などさまざまなテーマが取り上げられている。『土地と人々』の中でのユダヤ人に関する記述は少なく、各地域におけるユダヤ人の人口分布など、わずかに触れられているにすぎない。

## 5. 森についての記述とそれぞれの論考

リールは『土地と人々』の中で、上記のように社会政策につながると考えた民衆描写をすると同時に、二項対立的テーマを立てて独自の文化論を展開している。それが「畑と森」(Feld und Wald)、「道路と小路」(Wege und Stege)と「都市と田舎」(Stadt und Land)の三つの章である。この二項対立は自然と文明、あるいは文化と文明という図式にも重なる。リールにとって、「森と小路と田舎」は自然や文化、「畑や道路や都市」は文明の象徴である。これらの章の中で、最も広く世に知られ、いつの時代にも問題となり、ひいては、リールが森のイデオログと呼ばれるに至ったと思われる「畑と森」の内容について考察する。

この章は「我々ドイツ人は真正の森を持っている。それに対してイギリスは、もはや真に自由な森、社会的意義を持つ森を持っていないのも同然だ」<sup>55</sup>という文章から始まっている。「飼いな

<sup>55</sup> Riehl, Land und Leute. S. 55.

らされた耕作地である畑」と「野生を残す森」との対比が、ドイツではまだバランス良く保たれている。森は単に経済的価値からのみ語られるべきではなく、社会的、政策的な価値を持っているというのが、リールの基本的主張だ。「森こそが、今の時代の競争のせわしなさとは無縁なまま、中世さながら、農民が生きてゆける場所なのだ」<sup>56</sup>と、森の中には中世がまだ生きているとする。

歴史的にみると領主と民衆の森をめぐる争いは常にあったが、ドイツの非常に古い法原則に従えば、森と牧草地、水はあらゆるマルク構成員の共同利用であったとリールは言う。今も残っている共同使用の森では、「農民は木材の収穫、堆肥のための落ち葉集めが出来、家畜保護に許可が与えられ、芝の分配もされる。森以外のどこに、そのような習慣が維持されているだろうか？これが、まさにドイツの社会的状況の根幹なのだ」とし、「財産共有の理念は、古い時代の真のドイツ的理念だった」<sup>57</sup>と、リールはドイツの森のあり方に原始共産主義的な慣習をみている。そして、さらに続ける。「森だけが我々に警察の監視なく、自由の夢を与えてくれる。心ゆくまで存分に駆けたり、跳んだり、木によじ登ったりすることができる。ゲルマンの自由な森のこうした残滓は、幸いなことにドイツではほとんどの場所で維持されている」<sup>58</sup>と、財産共有の理念はゲルマン人のものであったことにまで遡っている。政治的に非常に自由だと標榜しているアメリカやイギリスを例にとり、「垣根によって周辺の森に自由に入ることもできないアメリカ人や、束縛を強いる公園しかなく自由な森を殆どもたないイギリス人にとって、自由を謳った法律がなにになるだろうか？」<sup>59</sup>と批判し、ドイツは自由な森を保持しているので、アメリカやイギリスよりも社会的自由を持っているのだと誇る。リールは、森には未来があり、だからこそ、広大な原生林を保有するロシアには大きな未来があると言う。さらに、「ヨーロッパの大部分は享樂の限りを尽くしたあげく、生を終えた国々である。なぜなら、その大地はもはや再び若返るような森を持っていないからだ。国だけが生を終えるのではなく、森を持たない民衆もまた死滅の道をたどるに違いない」<sup>60</sup>と述べ、ドイツ民衆の未来は森にあると主張している。そして、森に住む農民は粗野だが強靱な性質を持ち、孤独ながら自分自身を良く知っている。民衆芸術の源となる森の多い村々の住民は、豊かで清々しい精神的特色を持ち、そうした村々では原初からの良風美俗 (*Gesittung*) の精神が保たれていると、ドイツにおける森と民衆との関係の濃密さを強調している。だからこそ、「我々は冬に木材でストーブの火を絶やさないためにだけではなく、民衆生活をさらに快活に脈動させるために、ドイツをドイツ的なままにしておくために、森を保持しなければならない」<sup>61</sup>と主張した。リールは、こうした主張と合わせて、当時の森の荒廃や減少を憂慮している。森は人間の利害の犠牲になりやすく、1848年の革命時には広大な森を喪失したと嘆く。木は切り倒され、根は放置され、最後には焼き払われた。また、近年は、財政的事情から成長の早い針葉樹の植林が進み、広葉樹林が作り上げてきた誇り高い森の文化が失われてきているとしている。そし

<sup>56</sup> Riehl, *Land und Leute*. S.59.

<sup>57</sup> Ebd., S. 57.

<sup>58</sup> Ebd., S. 63.

<sup>59</sup> Ebd., S. 63f.

<sup>60</sup> Ebd., S. 61.

<sup>61</sup> Ebd., S. 61.



て、この章の最後で、リールは「原生林の権利」を提言している<sup>62</sup>。「数百年の長きにわたって、進歩という名のもとに畑の権利が一方的に是認されてきた。今、その大義名分に対して、原生林の権利を主張したい。(経済的効果を目的とする)国民経済学者は強く抵抗するだろうが、民衆研究を主とする社会政策家は、原生林の権利のために闘わなければならない」<sup>63</sup>と結んでいる。

なぜなら、リールにとって、「原生林は眠りにについている純然たる偉大な基本財産」<sup>64</sup>であるからだ。

以上が「畑と森」に書かれたリールの森に関する主張の概略である。リールのこうした言説を、さまざまな研究者が論考している。いくつかの例を挙げてみる。ドイツの民俗学者のアルブレヒト・レーマン (Albrecht Lehmann 1939~) は、『森のフォークロア』<sup>65</sup>の中で、「森のイデオログ・リール」という章をたてて、リールの言説とその影響を考察している。

19世紀を代表する政治的・国民主義的な森のイデオロギーを打ち立て、同時にのちのちまで大きな影響を与えた宣伝家がヴィルヘルム・ハインリヒ・リールである。文化史研究者、社会学者、民俗学者、そして小説家でもあったリールは、学問や芸術の分野で活躍したマルチタレントであり、イデオログとしての才能に恵まれ、世論に訴えることにかけては天才だった。森の文化的意義について語ったリールの発言には、独自のエコロジー的な分析も含まれるが、乱暴な推論に基づくものが多い<sup>66</sup>。

レーマンはリールの全体像を示しながら、その言説を批判している。しかし、「ドイツの森には中世の歴史が刻み込まれているばかりか、わが国民がたちまちのうちに若返る力も隠されている」、「人間にワインが必要なようにドイツ民族には森が必要なのだ」といったリールの主張は論拠のないこととしながらも、第二次大戦前夜には国民学校などの教科書にも紹介され、20世紀の半ばまで一般の人々の間にはごく当たり前のように伝承され、今日に至るまでリールは影響力を保っていると考察している。イギリスの歴史家・サイモン・シャーマ (Simon Schama 1945~) は、著書『風景と記憶』<sup>67</sup>のなかで、リールの思想を次のように述べている。「故郷はリールにとって愛国主義以上の何かであった。それは独自の習慣と言葉を持つ物理的地誌、つまりその土地にしみこんだドイツに固有の記憶であった。[...] 彼の書いた『ドイツ民族の自然史』<sup>68</sup>は、実に的を得たものと言える。なぜならそれはこの国の生活環境の社会学を創造しようという試み

---

<sup>62</sup> しばしば、Wildnisは「野生」と解釈がなされ、「野生の権利」という訳語になっていることが多いが、この章の文脈に沿って訳すならば「原生林の権利」が妥当だと考える。

<sup>63</sup> Riehl, Land und Leute. S. 69.

<sup>64</sup> Ebd., S. 58.

<sup>65</sup> アルブレヒト・レーマン：『森のフォークロア ドイツ人の自然観と森林文化』、識名章喜・大淵知直訳、東京、2005年。Albrecht Lehmann: Von Menschen und Bäumen. Die Deutschen und ihr Wald. Hamburg 1999.

<sup>66</sup> 同上、16~22頁。

<sup>67</sup> サイモン・シャーマ：『風景と記憶』、高山宏・梅正行訳、東京、2005年。Simon Schama: Landscape and Memory. 1995.

<sup>68</sup> 『ドイツ社会政策の基盤としての民衆自然史』のこと。

を、ただし極めて詩的な言語で表現しているからだ」<sup>69</sup>としたうえで、第2巻である『土地と人々』におけるリールの森についての考えを、従来とは全く違う視点で考察し、彼のリアリスティックな側面を指摘している。

森はドイツ民族文化の中心であり、森なき村などは歴史的建造物、劇場、そして美術館なき町に等しい。森は若者にとっては遊び場であり、老人にとっては祭りの場であるとしたリールの森の表象は、グリム寓話の世界に似つかわしい。しかし、リールの観察のすべてが歴史の裏打ちに欠けていたわけではない。彼が他の地域では斧で倒された広大な森林地帯をドイツがなんとか保持していると誇るとき、彼はこの奇跡がこの国の経済と社会の相対的な遅れの直接の結果なのだということをよく知っていた。実際、彼は後進性を幸運として喜んでいる。ドイツが無数の公国に分裂していたことが巨大国家の官僚によって押しつけられたかもしれぬ合理的かつ経済優先の計画の手の届かぬところで、こうしたすばらしい時代錯誤を温存させてくれたのだということも彼は承知していた。ドイツの機能不全こそが森にとっての賜り物であったのだ<sup>70</sup>。

そして、ドイツの歴史家、ヨハネス・ツェヒナー (Johannes Zechner 1953~) は、『不滅の森と不滅の民族』<sup>71</sup>の中で、ナチズムによる森のイデオロギー化に至るリールが果たした役割を考察している。この論文では、最初に、ドイツ人における森に対する意識の変遷が、以下のように説明されている。

18世紀のロマン主義の時代に、魂の深みがひそむ景色としての森への喚起が始まった。森は自然の象徴だとする意識が、ことに都市に住む住民たちに植え付けられた。当時のロマン主義的文学や音楽、絵画を通して、人々と荘厳な森との関連付けが行われたのだ。しかし、このロマン主義時代にはすでに、森のイデオロギー的発見も起こっており、森との芸術的かつ知的取り組みに政治的、国家主義的な特徴が加味された。1813~15年の反ナポレオン解放戦争の間に、ドイツ国民のひとつの特性を求める教養人たちの模索の中で、森はドイツ人のアイデンティティの主要なシンボルとなったのである。そのアイデンティティ探しにおける重要な意味を、ローマの歴史家であったタキトゥス (Tacitus, 55~120年?) の『ゲルマニア』 (Germania, 99) が担った。この著作は当時の国家主義者たちによって、ドイツ人についての最初の歴史書となり、その中で書かれたゲルマン的風俗や慣習についての記述は歴史的な検証のないまま、古代ゲルマン人の後継者たるドイツ人の特性として刻印された。タキトゥスの記述した森は、国家主義的思考パターンにおけるドイツ的文化とドイツの歴史への特別な関心を引き起こした。森はゲルマン部族発祥の地であり、彼らの政治的軍事的集会の場所であり、さらに崇拜の場所

---

<sup>69</sup> シャーマ、138頁。

<sup>70</sup> 同上、139頁。

<sup>71</sup> Johannes Zechner: *Ewiger Wald und ewiges Volk. Die ideologisierung des deutschen Waldes im Nationalsozialismus*. Freising 2006.

あったという解釈に変容していった<sup>72</sup>。

そういった解釈に加え、「リールが国家主義で地塗りした民俗学的著作の中で、エスニック化した森 (Der ethnisierte Wald) を表象することで、さらなる森のイデオロギー化の段階を示した」とツェヒナーは考察する。『土地と人々』での記述を分析し、「リールにとって、ドイツ民族が野生と結びついた森を保持することは、ドイツ文化と国民 (Nation) の繁栄のための保障を意味することだった。何故ならば、森の中には自然の野生的民族性の力があるとしたからだ。[・・・] リールは、自由の概念をフランス人が市民的・政治的自由の中に見るのに対して、ドイツの森での自由の中にみた」<sup>73</sup>とした。さらに、ツェヒナーはドイツでは、ナチスの政権掌握と共に、真の「リール・ルネサンス」が到来し、森を愛するドイツの民衆というリールの命題が何度も取り上げられ、ナチスの森のイデオロギーの確立のために使われたと記述している。その時代、リールの主要な本は再版を重ね、それらの本の前置きには、「今日なお模範となる」といったリールの森のイデオロギー化への業績が書かれているとしている。リールはロマン主義時代における文化的、芸術的に表象された森に、民族化した森という概念を付加し、それを民衆に広く提示することで、森を国家主義的イデオロギーの場へと変えさせた人物だったというのがツェヒナーの考えだ。その他、リールに関する論考は数多くあるが、その殆どが森のイデオロギーといった呼称でひととくりされたネガティブな印象を持つものが多い。しかし、また、全く違う分野からリールの森の思想を考察する研究者も出て来ている。風景学、都市学の歴史と理論を研究するヴェラ・ヴィッセンツォッティ (Vera Vicenzotti) である。紙幅がないので割愛するが、彼女は論文『都市と野生』<sup>74</sup>で『市民生活』と『土地と人々』からリールの都市批判と野生の概念を考察している。

## 6. 結び

リールの思想の全体像をつかみ取るのは非常に難しい。彼の扱うテーマが多種多様で、その文章も文学的な過剰装飾に満ち、披露される博識ぶりに幻惑される。デティールにこだわった描写があるかと思えば、理念的思考が脈絡なく展開される。人物像もなかなか複雑だ。自ら言う保守的思想の持ち主ということは免れない事実のようだが、ロマン主義的思想を持った旧時代の人間かといえば一概に言えない。リアリスティックな視点で、新時代における現実の民衆の姿をも記述している。

リールという人物の根底にあるものはなにか。『土地と人々』を考察してゆくと、この本を書いた当時のリールは、現役のジャーナリストであったということにつきあたる。リールは学生時代から 31 歳でミュンヘンに居を移す 1854 年まで、ジャーナリストとしてさまざまな地方紙や雑誌で 748 にも上る数多くの論説を精力的に書いた。シュミットの論説カタログ<sup>75</sup>を見ると、その対

---

<sup>72</sup> Zechner, S. 13f.

<sup>73</sup> Ebd., S. 15.

<sup>74</sup> Vera Vicenzotti: Stadt und Wildnis Die Bedeutung der Wildnis in der Konservativen Stadt. Kritik Willhelm Heinrich Riehls. Freising 2005.

<sup>75</sup> 脚注 12 参照。

象としたテーマの多彩さに驚かされる。シュミットのカタログは内容についての記述がないので、題名から推測するしかないが、政治、経済、社会論、階級論、ジャーナリズム論、音楽、教育、宗教、美術、演劇、美学、民俗、地理、文化史、歴史、建築、家庭論、外国事情、法律、農業、漁業、気候、統計学、交通論、写真論にまで筆が及んでいる。ジャーナリストとして、森羅万象、あらゆる方面にわたって論説を書いたことがわかる。そして、代表作となった1851年出版の『市民生活』も、彼のジャーナリスト時代に書かれていることに注目せざるを得ない。上述したように、1854年出版の『土地と人々』には、この時代に書かれた論説が数多く引用されている。シュミットの詳細な分析を踏まえて筆者が数えた限り、『土地と人々』には23の論説が転用、記載されている。1850年の「ラインガウの秋の手紙Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」や1851年の「南バイエルン高地からの文化像Ⅰ・Ⅱ」、同年の「リューゲン島からⅠ・Ⅱ」などの論説は、その典型的例だ。そして、森についての論説も多い。1851年には「森林地の減少」、「森・社会政策的予備研究」などを書いている。『土地と人々』の構成に一貫性のなさを感じるのは、リールがさまざまな内容を持つこうした論説を利用し、そこから彼独自の理論を作りあげようとしたことにあるのではないだろうか。

リールは、現場を通して見聞した情報をあますことなく読者に伝達し、さらに分析するというジャーナリスト本来の資質を強く持っていたと考える。リールは人工的なものをすべてを否定したと言われるが、論説をみると鉄道などの近代交通や新技術に関するものも多い。民衆の暮らしにかかわる事象全般について記述しようとするジャーナリストとしての姿勢が強く感じられる。論説を引用し、ジャーナリスティックな視点で民衆をめぐる状況を分析しながら、独自の社会政策論や文化論を構築しようとしたのが『市民社会』であり、『土地と人々』だったと思われる。

しかし、民衆の暮らしのリアルな描写に比べ、文化論や社会論になると、しばしば理念的、観念的な記述が見られる。リールは、民衆の生態を描くことにより、社会政策は自ずから提示されるとしているが、『土地と人々』の中で、それが成功しているとも言い難い。具体性に欠けているのだ。リールは、ミュンヘンでの新聞発行の計画が頓挫して思いがけず大学教授の地位を得て、学問的領域の中で生きることとなった。彼の前半生はジャーナリストであり、後半生は大学教授だった。ジャーナリスト時代に培ったルポルタージュ的手法は、民俗学におけるフィールドワーク的研究にとってかわったのではないだろうか。モーザーが指摘しているが、リールは民俗学 (Volkskunde) という言葉のかわりに、当初は好んで「民衆についての学問」(Wissenschaft vom Volke) を使っていたという<sup>76</sup>。いずれにしても、大きく括れば、リールが研究対象としたのはあくまで Volk だった。ここで、リールの考える Volk の概念に言及する必要がある。「政治用語では、一般に国民 (Nation) と民族 (Volk) は同義語として用いられている。しかし、Volk は言語や文化、宗教、歴史などの特徴を共有する住民としてのエスニックな人間集団をあらわす概念でもある」<sup>77</sup>とドイツの歴史家オットー・ダン (Otto Dann 1937~2014) は述べている。このように、Volk という言葉は多義的な意味を持っている。筆者は『土地と人々』を文脈に沿いながら翻訳してみたが、この本でリールが使った Volk という言葉は、後者のエスニックな人間集団を意味する

<sup>76</sup> Moser, Wilhelm Heinrich Riehl und die Volkskunde. S. 12.

<sup>77</sup> オットー・ダン：『ドイツ国民とナショナリズム』、末川清・姫岡とし子・高橋秀寿訳、名古屋、1999年、1~2頁。

「人々」、あるいは「民衆」だったと考える。「民族」と訳すると、内容に整合性がつかなくなる  
ことが多いのだ。たとえば、リールは「本来、プロイセンには国民 (Nation) などはまったくい  
ず、プロイセンの民衆 (ein preußisches Volk) がいるだけなのにかかわらず、プロイセンの国民  
の誇り (Nationalstolz) ということが言われている」<sup>78</sup>と記述している。ここで使われている Volk  
は、少なくとも民族という概念ではないだろう。プロイセン民族とは言えないからだ。むしろ、  
プロイセン部族という訳語があてはまる。リールは、講演『学問としての民俗学』の中で、「フォ  
ルクの概念は、広範な教養を前提に成り立つ抽象である。[・・・]エスノロジーの概念としてのフ  
ォルクは、血族、言語、儀礼、聚住によって結ばれた人間の大きな組織体の中の自然な分枝であ  
るが、その概念への到達は発達した教養階梯を待たなければならない」<sup>79</sup>と述べ、また、シュト  
レーロフは、「リールにとって、部族 (Stamm) や言語、風習 (Sitte)、集落が、Volk を形成す  
る基本的な判断基準となっている。」と分析している<sup>80</sup>。これらの記述を見ても、リールが使った  
Volk は、イデオロギーの内容を含む概念とは程遠いと、筆者は考える。日本語に翻訳された本の  
なかでは、リールが使う Volk は「民族」と訳されていることが圧倒的に多い。たとえば、レー  
マンの『森のフォークロア』の中での「民族と言うものは、森に住む農民に立ち帰ることがなけれ  
ば、彼ら農民から自然に生きる荒削りな民族魂という新たな力を汲むことがなければ、死に絶え  
るしかないのである」<sup>81</sup>といった記述には違和感を覚える。ここで使われている Volk は、民衆と  
訳したほうが内容に合っているし、Volkstum を、民族魂という言葉に訳することにも無理がある。  
ナチスを体験した今、リールが記述した Volk を「民族」と捉えるか、「民衆」と捉えるかで彼の  
思想に対する理解は大きく変わる<sup>82</sup>。確かにリールの言説はドイツ人を優先人種と捉える危うい  
思想を内包しているが、フェルキッシュ運動やナチス民俗学のなかで、リールの使った Volk が、  
意図的に民衆から民族へと変容させられていったのではないだろうか。リールに森のイデオロ  
グという呼び名がつけられたのは、まさに、その結果だと推察する。

最後に、リールの全体像をまとめてみたい。レーマンは、リールを批判しつつ、こう述べてい  
る。「リールは、さまざまな学問領域を横断し、社会運動を先導したまさに先駆者だった。近代林  
学や民族史、国民経済学、社会学、環境保護運動のコンセプトは彼に始まる」<sup>83</sup>。社会運動の先  
導者だったかの検証は難しいとしても、分野横断的、学際的研究の統合の道を切り開こうとした

<sup>78</sup> Riel, Land und Leute. S. 152.

<sup>79</sup> 河野眞：『ドイツ民俗学とナチズム』、東京、2005年、217頁。

<sup>80</sup> Strelow, S.202.

<sup>81</sup> レーマン、『森のフォークロア』、18頁。

<sup>82</sup> 森涼子氏は、論文『森林感から見る《森林保護》：自然保護運動史叙述への一手法として』（お茶の水史学 55号、2012年）の中で、リールの使う Volk について、次のように指摘している。「森の用益権をめぐって支配者と戦っていた《Volk》は「民衆」であり、森が脈動を温かく保つ《Volk》はドイツ「民族」である。—中略—《ドイツの森》、この考え方はロマン主義時代からあったものである。しかしこうした森ロマン主義を、リールは政治理論として体系化した。民俗学者リールは<Volk>という語のもつ二重性を巧みに操り、自然の中で生きる《民衆》を称揚することから出発して、自然に正当性の基盤を置く民族主義理論を作り上げた」。筆者は、リールの『土地と人々』における森に関する記述を読む限り、彼が森を使って民族主義理論を体系化したとは断言できないと思う。『土地と人々』の中での Volk という言葉の使われ方については、今後、より詳細に考察してみたいと考えている。

<sup>83</sup> レーマン、21頁。

人物であることは確かだ。また、1976年に『市民社会』<sup>84</sup>を編集し、再刊した歴史学者ペーター・シュタインバッハ（Peter Steinbach 1948~）が、序文で分析したリール像は興味深い。

リールは1848年革命とそれに続く反動の経過の中で、決して急進的な変化を望まず、時代に折り合ってなんとか生きようとした世代の平均的な市民の代表者だった。そして、革命後の政治的アパシーに陥っていた人々に対し、ひとつの理論を掲げることで克服を試みようとしていた。だからこそ、彼の著作が多くの人々に読まれたのだ。リールは復古的なロマン主義者でもなければ、反動主義者でもなかった<sup>85</sup>。

リールの思想を保守反動的だと批判するのは故のないことではないが、シュタインバッハが言うように、筆者も、リールは政治と社会の急激な変化を見つめ、新旧の異なる時代の価値観に揺れ動きながら、ジャーナリストとして、あるいは作家として、民衆になんらかの道を指し示そうとした1848年世代を代表する一人の都市市民だったのではないかと考える。『土地と人々』における辺境の土地に住む農民の描写が憧憬に満ちているのも、都市生活者たるリールの旧時代へのノスタルジーに思える。リールの文筆の絶頂期は、革命後の1850年代から1860年にあった。リールは、ジャーナリストとして数多くの論説を書いた他、28歳から37歳までの10年間に、生涯の代表作となった『市民社会』、『土地と人々』、『家族』、『プファルツ人』、『バヴァリア』を、次々と上梓している。大変革期だからこそ、幅広いテーマで時代と人々を書きつくそうとした意欲と、その精力的な仕事量には驚かされる。識字率が急激に上昇し、1845年には高速印刷回転機が、1849年には電信装置が発明され、新聞や雑誌の購読層が大きく広がったこの時代に、近代ジャーナリズムが形成され、リールはジャーナリストとして活躍の場を得た。さまざまな新聞社での仕事を通して、「文筆家」(Literat)としてのリールの骨格が形成され、それは、学問的分野で生きた後半生にも影響し、最後まで一人の文筆家であることの姿勢は揺るがなかったのだと推察する。リールは、晩年の1894年に書いた自伝的著作『現世主義者の宗教的研究』(Religiöse Studien eines Weltkindes)の中で、次のように述懐している。「私は、牧師や教授になることが出来ないというネガティブな理由から文筆家になったのだろうか？それは全く違う。今日、使い古されてしまった<文筆家>という言葉は、当時の私には大変誇り高く、魅惑的に響いたのである。文筆家は、私にとって、最も自由な頭脳労働者の、そして、個人的職業の典型という意味をはらんでいた。私は、文筆家を真の理想主義者と理解し、賢明な実務家と把握していた」<sup>86</sup>。

リールが『土地と人々』で記述した国家と民衆、地方分権主義と中央集権国家、あるいは大都市化の弊害、消えゆく民衆文化の保護などの問題提起は、今日につながるような普遍的なテーマを含んでいる。リールの持つ多様な側面は、それぞれの時代を映し出すプリズムのように、現代においてもアクチュアリティは失われていない。

(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)

<sup>84</sup> Riehl: Die bürgerliche Gesellschaft. Hrsg. von Peter Steinbach. Berlin, Wien 1976.

<sup>85</sup> Ebd., S. 8.

<sup>86</sup> Riehl, Religiöse Studien eines Weltkindes, S.466f.